

俺のフラグは よりどりみみデレ3

栗栖ティナ
挿絵／火曜



立ち読み版

◎ 登場人物紹介 ◎



さくら こうじし おん

桜小路詩音 【属性】お嬢さま、ヤンデレ

転校初日に遼人が出逢った美少女。遼人に一目ぼれて、おしかけ女房のように振る舞う。時には嫉妬でヤンでしまうことも。



ひびき み お

響美緒 【属性】ツンデレ、幼馴染み

遼人の幼馴染みの活発な少女。通称「デレのないツンデレ」で、照れ隠して素直な態度を取れない。



すおう あい か

周防藍花 【属性】クール

いつも静かに本を読んでいるクールな少女。遼人の隣の席。



はぎ の みどり

萩野翠 【属性】女教師、ママ

聖エスタド学園の学園長。遼人とは遠縁の親戚という関係。遼人を学園に招き入れた目的があるようだが……？



こばやしじゅり

小林樹里 【属性】ヤンキー

不良少女。一匹狼な空気を漂わせている。遼人に「可愛い」と言われたことを気にしている様子。



みやしたとも こ

宮下智子 【属性】委員長、メガネ

クラスの委員長。みんなのまとめ役を務めている。とても真面目な性格で、よく言い包められてしまう。



なな み え り な

七海絵里奈 【属性】腹黒

同じクラスの女の子。明るく、みんなのムードメーカー的な存在だが、それと同じくらいトラブルもふりまく。



すずむら さ さ ら

涼邑紗々羅 【属性】妹、ヤンデレ

遼人の一つ遣いの妹。過剰なくらいのお兄ちゃんっこで、血がつながった兄妹でありながら異性として兄を好いている。



すずむらりょうと

涼邑遼人 【属性】主人公

本作の主人公。知らず知らずフラグを立ててしまう体質の持ち主。ヒロインの「乙女の破片」の力を借りて、様々な力を使うことができる。



プロローグ

「優しさ」の爪痕

「頭……痛いです。お、お水う……」

そんな遼人の期待も虚しく、抱き合ったまま転がる金髪と黒髪の美少女は、弱々しい呻き声を漏らし、ぐったりとしてしまっていた。

どうやら二人揃って、アルコールに対しての免疫が極端に弱かったらしい。普段は常に対立しているのに、こういうときはなぜか息が合うのが面白い。

（つて、そんな微笑ましく見守ってる場合じゃないだろ！ こんな、四人同時に迫られるとか、現実リアルじゃなさすぎる!! 洒落にならないってばっ!）

勇気を振り絞って拒絶するべきか、だが、そう告げた後の反応を想像すると気が萎えてしまつて踏ん切りがつかない。

絶体絶命。そんな単語が脳裏を過ぎつた——直後だった。

ダアアアアアアッ!

「ひっ!!」

何かをテーブルに打ちつけた大きな音が、食堂に広がっていた桃色の甘い雰囲気を一瞬のうちに吹き飛ばした。

遼人、そしてそれぞれのやり方で迫っていた乙女達は凍りついたように動きを止め、その音のした方へ一斉に視線を向ける。

「……不道徳です。あまりにも不道徳すぎますっ!」

ただ一人、姿勢正しく席に着き、黄金色の泡立つ液体で満たされたグラスを手に叫んでいるのは、眼鏡が知的な雰囲気醸し出しているショートヘアの少女。

『乙女の破片』という厄介なものを宿している影響で、やたら暴走癖のある乙女達の中ではおとなしく、いつもブレーキ役を担ってくれている学級委員長、宮下智子みやした ちこだった。

「あ、あの……委員長？」

「五人でなんて、不謹慎にも程がありますよ！ それも、こんな場所……破廉恥です、変態です、淫乱です、獣じみてます!! 絶対、見過ごせません！」

手にしたグラスの中身を一息で呷り、傍らの瓶から残りを注ぎながら叫ぶ委員長。

遼人の記憶にある限り、瓶にはまだ四分の三以上残っていたはずの液体が、その一杯で空になってしまっていた。この騒動の中、一人延々と飲み続けていたのだろうか。

「な、何だよ、委員長！ 今、あたい達は忙しい……」

「黙れ、そして下がちなさいっ！ この不埒な女どもっ!!」

ダァンッ！ 再び一息で空けたガラスのグラスを、碎けてしまわないか不安になる勢いでテーブルに叩き置くと同時に叫んだ智子が、乱暴に席を立つ。

普段のおとなしく控え目な印象からは想像もつかない、直視するのもためらわれる恐ろしい迫力。強気な樹里ですら、恐怖に小さく肩を震わせて、そっぽを向いてしまう。

「どいつもこいつも、あまりにも身勝手です！ 人の気持ちも考えずに暴走して、盛り

ついた雌猫よりも浅ましい！　あまりにもゲスです!!」

ガシャンツと今度は椅子を蹴飛ばしながら、遼人達の方へ歩み寄ってくる委員長。その目は完全に据わっていて、有無を言わさぬ殺気を放っている。

(で、泥酔してる……間違いない……)

一人であれだけ空けたのだから、無理はない。酔いが、普段、押し殺している鬱屈を表面に押し出しているのだろうか。逆らうことを許さない、恐ろしい迫力だ。

「少しは年相応の慎ましさを持ちなさい！　ほら、とつとと下がるっ！」

「「は、はい！」」

踏み抜かんばかりの勢いで床を蹴った委員長長の命令で、遼人に群がっていた乙女達はまるで新兵のように声を揃え、逆らうことなく引き下がっていく。

私の強い乙女達にしては、珍しく素直な反応。それだけ、酔いに支配された委員長が恐ろしいということだ。『鬼軍曹』という表現が、これほど似合う雰囲気はない。

(た、助かった……?)

解放され、大きな安堵と少し残念な気持ちを引き出すように息をついた刹那。その顔を覗き込むように、迫力溢れる三角眼になった智子が近づいてきた。

「そもそも、遼人君が悪い！　あなたの態度は、あまりにも不誠実です!!」

「へっ？　お、お、俺が？　あの、どうして……」

「みんなの気持ちを手だ挙げ句、答えも出さないうんて、無責任だと思いませんか!？」
「そ、それは……」

痛いところをズバリと突かれ、遼人は何も言えず顔を背けてしまう。

いくら強引に迫られているとはいえ、自分がしつかりと意見を言えば、ここまで振り回されたり、場の空気が荒れることもない。少し考えれば、わかる話だ。

（でも、きっぱり断つたりしたら、みんなを傷つけちゃう……いや、俺がそう怖がつているだけで……っ……何だよ、これ……胸が、ズキズキする……）

まるで針で執拗に突かれているかのような鋭い痛みを覚え、顔を擧^{しか}めてしまう。

そんな遼人へ、酔いに背を押された委員長が更に詰め寄ってくる。

「そして……何より、不公平です!」

身体が火照っているからか、イチゴジャムのように濃密な甘い香りが強く漂ってきて、それに惹かれるように智子の方を向き直った瞬間。

——ちゅっ。そんな小さな音と共に、熱い唇が口元に接触した。

「んあっ?! なっ、え、あっ、い、今、ええ、キ、キス……」

事故のような接触に慌てふためき、言葉を失う。そんな遼人と鼻先が触れ合う至近距離まで顔を近づけている委員長は、相変わらず据わった目で少しも動じる様子はない。

今のは、何だったのか。不規則に高鳴る鼓動を堪えつつ、問いかけようとするとするよりも先

に、なぜか自らの襟元に手を伸ばしてそこを緩め始めた智子が叫ぶ。

「みんな……妹の紗々羅ちゃんとまでエッチしているのに、どうして私にだけ何もしてくれないんですか！ 寮仲間を不公平に扱うなんて、酷いです！ 甲斐性なしですっ!!」

「はっ？ あ、あの、それ、どういう……って、ちよ、あ……」

暴走する委員長は制服とシャツの胸元を大きくはだけさせた挙げ句に、戸惑う遼人の股間へ手を伸ばしてきた。

少し手こずりながらも、ベルトとズボンのボタンが順々に外される。

先程、四人に迫られた甘い雰囲気に乗せられて勃起してしまった剛直が、その開いた隙間からバネ仕掛けのようにピンツと勢いよく立ち上がった。

「私だって、遼人君が好きなんです!! ちゃんと、みんなと平等にしてください!」

そんな厳しい声と共に、間髪入れずそこを手で強く掴まれてしまう。

「なっ、あの、ど、ど、どこを……んくっ、落ちていくれ! あぐうっ!」

酔いのせいで加減がわからなくなっているのか、比較的の小柄な体型に見合った細い指が、竿肌に浮かんだ血管を潰さんばかりの勢いで食い込んでくる。

ふくれあがった海綿体が押される鈍い痛みと、それを塗り潰す心地よく痺れる圧迫感。意志に関係なく硬さが増し、指を押し返さんばかりに表皮が張ってきてしまった。

「むう、どんどん大きくなってきてますね。これは、ちゃんと反省してくれているという

ことですか？ 私も、みんなと同じようにしてくれるんですね！」

素直な反応を見せる剛直を満足げに見つめながら、眼鏡の委員長は慌ただしくスカートを捲り上げ、その生真面目な性格に似合う純白のショーツをさらけ出す。

更に片手でその股布を横へずらし、薄茶色の茂みから見え隠れする割れ目をあらわにしなから、そこをためらいもせずに肉幹の先端へ擦りつけてきた。

ヌチュツ……ニチュツ……。

「ひうつ!! 同じようにって、まさか……委員長、落ち着け……うわあつ！」

亀頭をじわりと湿った肉粘膜で舐め上げられる、甘い快感。

何をやるうとしているのか察し、慌てて止めようとしたときには手遅れだった。

ズップウツ、ズブブツ、ズボオツ!!

「はぐうんつ！ ひいつ、くつ、お、大きい……んぐつ、はあ、ふあんんつ！」

ヌルンツと滑る感触と共に、肉槍が茹だるように熱い膣壺へ入り込んでいく。

特に狭まった部分でも止まることなく突き進み、遼人が声を出す間もなく、そのすべてがしっかりと埋まってしまった。

「こんな、は、入っちゃってる……うわっ……」

「はあ、はい……これで平等ですう。私の初めても、ちゃ、ちゃんと遼人君に……」
驚き、目を見開いて訴える遼人へ、頬を真っ赤に染め上げた委員長が満足げに返す。

その喜びを訴えるように、熱く滑る脛壁が収縮し、中を埋める屹立を「圧倒してきた。軽く首を上げて結合部を覗き込むと、突き刺さる肉竿を伝い、赤い破瓜の証が早くも溢れ出てきているのがはっきりと見える。

（う、嘘だろ！ こんな形で委員長の前初めて……洒落になってないっ!!）

「でも、まだです。ちゃんと、最後までエッチ……んはあつ、し、してくれないとお」

呆然とする遼人を見下ろしながら、智子は息をつく間もなく腰を振り始める。

小さな尻房を弾ませ、トレードマークとも言える眼鏡がずり落ちてしまいいそうな激しさで、全身を上下に揺さぶる。

「委員長、ま、待った！ いきなり、そんな……うぐつ、ああつ、ううつ!!」

純潔を失ったばかりの狭苦しい肉壺で、肉幹が根元から先端まで熱く扱かれる。

こんな形で学友の初体験を奪ってしまった罪悪感も吹き飛んでしまふ、竿肌が少しずつ舐め溶かされていくかのような、甘美な刺激。

皺がなくなるくらい伸びきった壁面に雁首が食い込み、出入りに合わせて押し込まれたり捲れたりするのが、特に強い、ズンズンと腰まで響く快感流を生み出す。

「はひいつ、はあ、何だかあ……お股がジンジンしますけどお、でも、らあ……らいじょうぶそお……んふつ、もつと痛いかと思っていましたけど、問題ないですう」

「そ、それはよかったけど……でも……」

「ふあんっ、はあ、はふっ!! ほら、涼邑君も動いて……んくっ、女の子だけにさせるなんて、不公平です! ちゃんと、一緒に……きゃふっ、んっ、はんんっ!!」

「い、いや、そんなことより、どうして、こんな……んあっ、ううっ」

「私も遼人君が好きだって、言ったじゃないですか! 女の子の一世一代の告白を信じてくれないなんて、不誠実です!! そんなの……んふっ、はあ、お、お仕置きです!」

グツチュツ、ヌプツ、ズブリユツ!

戸惑う遼人を責めるように、委員長の腰使いが激しさを増していく。

上下運動だけではなく、踊るように前後や左右への揺さぶりも加わり、肉槍が熱く蕩けた腔内をマドラーのごとく掻き回す形になる。

一部が強く擦れたり、そつと撫でるような淡い接触になったり。刺激の緩急が大きくなり、それが昂りをますます押し上げてくれた。

(それに、胸が……さつきから、凄くゆ、ゆ、揺れて……)

ぶるんっ、ぶるんっ。そんな音が聞こえてきそうな勢いで、はだけた胸元からこぼれる双乳が、ダイナミックに揺れる。動きに合わせて、縦長や横長に形を変える隆起。その頂点を飾っている桃色の突起はツンと可愛らしく尖り、彼女の昂りを訴えていた。

「んあっ、はあ、涼邑君、目がエッチになってます! 盗み見なんてえ……はひっ、よ、よくないです! とつても……んふっ、はあ、不道徳ですうっ、ふあ……んっ、でも、今

はエッチをしているからあ……それでいいのでしょうか？」

「うあつ、はあ、き、聞かれても……そんな……んっ、ううっ」

「あはあつ、はあ、そう言えば……前に樹里さんとの闘争ロツダでしたときも、ここ、凄く見てくれていましたね。私、あのときからずつと……涼君のことお……」

「闘争ロツダ……うっ、そう言えば、そんなことも……」

少し懐かしげに目を細めながら、智子の腰使いが加速していく。

更に強くなる摩擦に加え、以前の闘争ロツダ——今、目前で悩ましく震えている双乳で扱かれたときのことを思い出してしまい、屹立の感度が更に高まってしまふ。

「ひやうっ、んっ、オチンチン、ビクビク動いて……んふっ、ほ、本当にエッチで不道徳です。もつともつと、いっばいお仕置きしてあげないとダメ……くふあつ、あんっ！」

「そんなっ！ む、無理……こんなに動かれたら、誰だつて……あぐっ、ああっ！」

じゅぶじゅぶと卑猥な水音を高く響かせながら続く、リズムカルな抽送。

結合部から飛沫となつて飛び散る淫液は、破瓜の証の赤色がかなり薄まって淡い桜色になつてきていた。それだけ、この眼鏡の委員長も甘い快感に襲われている証拠。竿肌を感じる摩擦が、最初よりもはつきりと湿り気を帯びていることも、それを裏付けている。

「はふっ、遼人君！ もつとおつ、はあつ、はぐうっ、んうっ！」

「委員長……お、俺……」



(昨日、紗々羅や美緒としたとき、大丈夫って……そんな……)

大丈夫と言っても、確実ではない。いざというときは責任を取らなければいけないという覚悟は持っていたが、それでも聞き流すことはできない事実。

「って、待った!! それなら、尚更、今日は……あの……」

過ぎたことはともかく、今、新たな危険を犯すのはダメだ。ハッと気づき、慌てて止めようとした——そのときには、もう亀頭の先端に熱く滑る粘膜肉が押し当てられていた。

又チュウツ、ズリユルルウツ、ズップウウウウツ!

「んくううつ、ふあひいつ、あああーっ! あはあつ、きたあ……んふつ、遼くんの勃起チンポお……中にいつ、私の危険日マ○コに、ズボズボくりゅつ、ひぎつ、ああっ!!」

ヤンデレ少女の歡喜に震える声が、殺風景な部屋全体に響く。

それと同時に少年の剛直は、熱い蜜液にコーティングされた膣道へ滑るように侵入し、そのまま根元まで余すところなく啜くえ込まれてしまった。

「はふつ、ああっ! イツ……あひいつ!! これえ、こ、この感じ……遼くんの熱いチンポで、オマ○コいっぱいにされる感じ、やっぱり幸せ……んひつ、ああっ!」

「はあはあ……ううつ、詩音、やめ……んあつ、こ、こんなの……」

必死に身体をくねらせ、何とか暴走する黒髪の幼馴染みから身体を離そうと試みる。

だが、手錠の鎖がカチャカチャと虚しい金属音を響かせるだけ。

腰も肉槍から伝わってくる甘い痺れで脱力してしまっていて、さして重くもない少女の肢体をはね飛ばすこともできない。

何より、入れるときは柔らかく綻んでスムーズに迎えてくれた膣壺が、今はゴツゴツとした竿の形に沿って壁面を波打たせ、隙間なく吸盤のように張りついてきている。

軽く腰を引こうとする度、表皮が持つていかれそうなくらい強い摩擦を感じ、その刺激でますます身体が熱く痺れてきてしまう。

「ふふっ、動きたいですか？ 遼くん、今日は積極的い……危険日マ○コって聞いて、興奮しちゃいました？ 私を孕ませたくて、我慢できなくなっているんですね」

「ち、違う！ むしろ逆というか……」

「やっぱり、遼くんは私の王子様。考えていることが同じです。私も、今日はいつもとより感じやすくなってるんです……んっ、孕みたくて……今日こそ遼くんの赤ちゃんをしつかりと孕んで、愛の証を……作りたい……んくっ、ふあふっ、はひい、イイツ!!」

恍惚と呟きながら、詩音がその荒ぶる気持ちを全身で表すような勢いで動き出す。

竿肌に沿って蠢き、ねっとりと舐め上げるように擦れる膣壁。滴る大量の愛蜜が情欲を

「くうっ、はうっ、くううっ！ う、動くの……ダメだつて!! やあつ、ひぐっ、こ、こんな……きつつ、ううっ！ す、吸われるみたいなあ……あああつ！」

暴走する幼馴染みを止めようとするとする声も、背筋を駆け上る快感電流で上擦ってしまふ。いつも以上に強烈な密着感が、単純な摩擦ではない、まるで尿道を吸いしゃぶられているかのような刺激も与えてくれていた。

ふわりと柔らかく舞い上がるスカートから覗く、むっちりとした艶やかな尻房。そこが腰の付け根に叩きつけられると同時に、亀頭が行き止まりに衝突する。

すると、小さな肉室の入口が生き物のように蠢き、透明のカウパー腺液が滲む鈴口を啜え込もうと言わんばかりに絡みついてきた。

「あふうっ、んんうっ！　そこ、ここですう！！　子宮、子宮に感じるっ、かぁ、感じたいのおっ、んふっ、精液、熱いのドクドク……ひぐっ、はぁっ、ひいっ！」

男と女の本質的な部分で行う、熱いディープリキス。その快楽に酔いしれた詩音は、座り込んだまま踊るように腰をくねらせ始めた。

ヌチュウツ、グチュルルウツ、ヌツプウツ！

白い太股で少年の胸を締めつけ、腰骨に滑らかな尻肌を擦りつけながら、大きな楕円を描くようなイメージで身体を回す。

濡れた媚肉を掻き分ける音と共に、奥に押し当たっている亀頭が子宮口を錐のように突き抉る形となり、より深々と埋まっていくのが強くなる締めつけでわかった。

長い黒髪がなびき、こぼれ落ちている巨大な双丘が水風船のようにたぶんと瑞々しく

暴れ跳ねる。そんな乱れる美少女の姿で、視覚的にも欲情してしまう。

「こんなつ、し、詩音、激しい……うああつ、ああつ！」

ダメ押しとばかりに、張りつく肉壁が根元の方から奥に向かって波打ち始めた。

込み上げてきているものを、そのまますべて搾り出されてしまいそうな動き。

理性で抑えられるような、生半可なものではない。ためらいなどすべて吹き飛び、ただこの昂りを発散させたいという衝動に、頭の中が支配されてしまうほどの快感。

密着した粘膜壁を押し返さんばかりの力強さで肉幹がふくらみ、振動を始める。

「はふうつ、はあんんうつ！ きて、遼くん、私の危険日マ○コで射精して、早くうつ、種付け……いっぱいドクドク種付け射精して！ 私にいつ、か、家族くださいい！」

「なあつ、ううつ、俺……ううつ、くんつ、はぐつ、うああつ!!」

鼻にかかった甘ったるい叫びと共に、黒髪の美少女の背筋がビクンツと跳ねた。

波打つ膣道が、少年の中に残ったわずかな理性も砕く強さで収縮し、脈動する剛直が一回り小さく潰されてしまいそうな強さで圧迫される。

竿を走る甘美な痺れが、芯に凝縮されていく恍惚快感。遼人はだらしなく開いた唇から荒く息を吐き、反射的に腰を浮かせてしまう。

「イッ……イク、出る!! 俺えつ、うつ、うああああつ!!」

「んふうつ、はあ、きてえ！ 遼くんのチンポで種付けえ、種付けアクメさせてえ！」

ビウルウウツ、ドツプウツ、ビウルルルルウウツ！

黄色く上擦つた声で叫ぶと同時に、肉壺に潰された屹立の先から、噴火のような勢いで白濁が迸る。密着する子宮口を乱暴に打ち叩き、綻んだ隙間から中へ流れ込む。見えるはずのない光景を、亀頭を吸いしゃぶる入口の蠢きが教えてくれている。

「くひいつ、はあつ、ひんんんつ！ あはあつ、イイツ、きいつ、きてますう、遼くんのザーメン……赤ちゃんの素、私の危険日子宮にいつぱいくりゆうつ、んんうつ♪」
腰を大きく回し続けながら、ヤンデレ少女は膣内射精の快感に酔いしれていた。

ドクンツと跳ねる肉幹から濃い白濁が噴き出る度、詩音は胸のふくらみを艶めかしく揺らしながら、背筋を大きく仰け反らせる。

「子宮に染みてきます、熱いいつ、ふあつ、ああ、あちゅい……遼くんの精液で、子宮火傷しちゃいそお……んふつ、はあ、幸せです、これえ、この感じい」

綻ぶ濡れ唇の隙間からうつとりと甘い咬きを漏らしつつ、黒髪の少女はまるで糸が切れてしまったかのように、ぐったりと前のめりに倒れ込んできた。双乳が赤い痣だらけになった胸板の上で扇情的に弾み、鼻先が触れ合いそうな至近距離まで顔が近づいてくる。

「詩音、俺……んっ、あ……あの……」

「夫婦です、遼くんと私……可愛い赤ちゃんをたくさん作って、幸せな家族に……」
息を切らして呟く詩音の瞳には、また尋常ではない赤い光が浮かんで見えた。

いつもの光が消えた暗いものより、更に底知れぬ狂気を漂わせている。下手に刺激したら、間違ひなく恐ろしい破壊が訪れてしまう。そんな嫌な予感が胸を過ぎり、絶頂で火照っていた身体が急速に冷えていく。

「幸せな家族って……んっ、はうっ、くっ……」

まだ物足りないと言わんばかりに、射精を終えたばかりの肉槍を締めつけてくる膣内。じっとしていられないほどのくすぐったさが竿の芯を走り、落ち着かなく腰を震わせながらも、遼人は何とか彼女を落ち着かせる糸口を掴もうと問いかける。

「欲しいんです、家族……もう、一度と寂しい思い……したくありませんから。だから、遼くんと一緒に……ちゅっ、はぁ、作るんです。私だけの家族う……んふうっ」

額、頬、唇の脇。雨あられのように優しいキスを落としながら、詩音が切々と語る。

「ずっと一人だったこの家を、私の家族でいっぱいにするんです。私を見てくれる、私を愛してくれる大切な人達……それが、私の一番の夢。この寂しい屋敷を掃除するとき、そればかりを空想しているんです。いつも……いつも」

「家族……」

「はい。旦那様は遼くん、お母さんは私。最初の子供は、やっぱり遼くん似の男の子がいいですか？ 跡継ぎです。あつ、でも、女の子の方が育てやすいとも聞きますね。うん、遼くん、私の血を引く赤ちゃんなら、性別なんてどうでもいいくらい、愛しくて大

切な子供です。どっちもたくさん……たくさん愛してあげないと」

瞳の赤い輝きを更に強めながら、ヤンデレ少女はいつも以上の早口で語り続ける。

「もちろん、兄弟……弟か妹もたくさん作りましょうね。だって、一人っ子は寂しいですから。家の中が、いつも子供達の明るい声でうるさいくらい賑やかになるように、たくさん……大丈夫です！ この家は無駄に広いので、四人や五人……野球チームが作れるくらい赤ちゃん産んでも、余裕なくらいですし。家計も心配いりません、遺産か何かわかりませんが、私名義の口座に十分な額がありますからね。だから、遼くんは余計な心配は一切せずに、私を……私と私達の家族を愛してくれることだけ、考えてくれればいいんです。何だか想像するだけで、楽しくなつてきちゃいました。子作りだけじゃなくて、^{しつけ}躾も頑張りましょうね。でも、私……遼くんと私の可愛い子供を、ちゃんと叱れるかどうか少し不安です。つい、甘い顔ばかりしちゃいそう。そのときは、遼くんが父親として威厳あるところを見せてくださいね。フオローは私がしつかりしますから」

「あ、あの……詩音。落ち着いて！ 俺達、まだ学生だし、その……」

息つく間もなく妄想を語り続ける詩音に、遼人は必死になつて声をかける。

この少女の暴走癖にはだいぶ慣れてきたはずなのに、今日はその中でも別格。今までにないくらい狂気と、鬼気迫る思いが伝わってきた。

「学生？ そんなの、私達の愛に比べれば些細な問題です。あんなところに、未練なんて

ありませんから。……それとも、遼くんには何かあるんですか？」

「えっ、えっと、それは……」

「あの金髪ゴキブリ？ 暴力しか脳のないヤンキーの小娘？ 作り笑いばかり上手な腹黒女？ 真面目バカの眼鏡？ 根暗な本オタク？ それともブラコン妹？ まさか、私達を利用して、料理しか脳のない年増女ではありませんよね？」

寮に住む仲間達を一人ずつ罵倒する声と共に、ちょうど肩を掴んできていた黒髪の少女の手に強い力がこもってきた。爪が皮膚に食い込み、鮮血が滲む。だが、そのジンジンと響く痛みを気にしている余裕もないくらい、ヤンデレ少女の詰問は続く。

「遼くんは優しすぎます。だから、あの雌豚どもをはっきり拒絶できずに、期待を持たせてしまふんです。……あつ、でも、いいんですよ。そういう優しい遼くんだからこそ、私は好きになつたんです。優しさにつけ込む恥知らずの害虫は、始末すればいいですし♪」

「優しすぎる……っ……いや……はつきりしないだけだ。俺……」

そう呟くと同時に、忘れていた胸の激痛が蘇ってきた。

（結局、詩音がこうして暴走するのも、俺がはつきりしないからだ。受け入れるか、拒絶するか。どっちもできずに、言葉を濁すだけ。優しいって言葉を免罪符にして……）

昨日から何度も心に浮かんでくる、後悔の念。

考えるほど胸の痛みが強くなり、鉛でもつけられたかのように身体が重くなる。

(全部、俺が……)

いよいよ、何か決定的なものが胸の奥から込み上げてきそう。

言い知れぬ不安に、目の前が真っ暗になりかけた——そんな少年を現実の世界に引き戻したのは、首筋に走った鋭い痛みだった。

「あぐっ!! なっ、えっ……し、し、詩音、何を!」

顔に口づけの雨を降らしてきていた黒髪の美少女が、いつの間にか自らの首筋へ顔を埋め、そこへかぷりと噛みついてきていたのだ。

尖った八重歯が汗ばむ肌食い込み、そこから赤い鮮血が滲んでしまっている。

「んふっ、はぁ、マーキングです。ふふっ」

唇を離し、そこに付着した血を舌でチロリと舐め取りながら答えるヤンデレ少女。

赤い瞳の輝きのせいもあり、まるでホラー映画に出てくる吸血鬼のような雰囲気。

恐怖で問いかけようとする声が喉の奥に引っかかり、ただ震えることしかできない。

「遼くんは優しいから、言葉で雌豚どもをはね除けることができまけんよね? だから、こうして刻み込んでおくんです。全身に、もつと……ちゅっ、はぁ、遼くんが私だけの王子様である証い……んぐっ、ちゅっ、ちゅううっ、はぁ、ちゅぱっ!」

熱く掠れた声で説明しながら、詩音は再び少年の首筋へ顔を埋め、そこに繰り返し噛みついてきた。前歯と八重歯を肌に食い込ませ、いくつもの歯形を刻み込んでいく。



見ると、他の乙女達は『とぼつちりはごめんだ』と言わんばかりに距離を取り、部屋の隅の方に引き下がってしまっている。

(みんな、俺のこと好きとか言ってたのに、ちよつと冷たくないか!?)

口に出せない抗議の言葉を、心の中で叫んだ直後。ギシッとベッドのスプリングを軋ませながら、処刑人達ががほほ同時に迫ってきた。

「証明してあげます。遼くんを……王子様を誰よりも喜ばせられるのは、私だと」

思い詰めた表情のまま呟いた黒髪のヤンデレ少女が、いきなり自らの黒いレースショーツを脱ぎ捨てた。寝転がる遼人の頭の傍らに、ふわりと舞い落ちる小さな布地。その艶やかなデザインの下着に、思わず視線を奪われてしまった直後。

クチュツ……チュプウツ……。

「んあっ!? あっ、ううっ」

白濁の残滓に塗れていた剛直の右側に、ぴったりと吸いついてくる濡れた感触に、思わず声が大きく跳ね上がってしまった。

「挿入はルール違反でも、ここを使うこと自体は問題ありませんよね。私の……んふっ、遼くん専用のお嫁さんオマ○コで、綺麗にしてあげますから……ひんっ、ふあうう!」

少年の腰の右側に、正座をするように座り込んできた黒髪ヤンデレ少女。

そのまま軽く仰け反るようにして腰を前に押し出し、捲れたスカートから覗き見える肉

唇を、そそり立つ幹竿に密着させてきたのだ。

うっとりとして声を震わせ、はだけた胸元から覗く巨乳をぶるんつとダイナミックに揺らしながら、膝を屈伸させて身体を上下に振り動かす。

その動きに合わせて、小刻みに蠢く小陰唇に竿肌が熱く擦られる。蜜液に塗れた肉ピラはまるで吸盤のように張りつき、表皮が持つていかれそうな強さで引つ張られてしまう。

「うあつ、詩音、こ、これ……んっ、うううっ！」

今までに何度も交わり、今日も気が遠のくほど立て続けに精を搾り取られてしまった、馴染み深い肉壺の感触。蠢くヒダに舐めしやぶられているだけで、その奥の締めつけや壁面の絶妙なざらつきまで肉竿に蘇り、急速に快感が込み上げてくる。

「ふふっ、どんどん大きくなってきていますね、遼くんのオチンチン。やっぱり、私のここが……んはっ、オマ○コが一番って言ってくれてます……んふっ、ああっ！」

うっとりとして目を細めたヤンデレ少女は、勝ち誇るように呟き、出遅れて立ち尽くしている金髪ツインテールの少女に小さな笑みを投げかける。

「ま、待ちなさいよ！ 一人で先走って……ずるい!! ひ、卑怯！」

「何とも言いなさい……んふっ、はあ、あ、愛に早いも遅いもありません。気持ち素直に……あふうっ、より熱く伝えた乙女が、勝者になるのですっ！」

「言ったわねえ!! 負けない! もう、昨日までのあたしじゃないし……りよ、遼人を好

きだつていう気持ちは、誰にも負けないんだから！……見てなさいよね！」

当事者である遼人を蚊帳の外にして言い合う、幼馴染みの少女達。

いつもの調子で武力衝突が始まるのではないか、そんな不安が部屋に流れ始めた直後、真つ赤な顔で自分に言い聞かせるように叫んだ美緒が、詩音を真似るように自らの淡い桜色のショーツを乱暴に脱ぎ捨てた。

「ちよ、美緒……んぐつ、うあつ、か、顔に……んぐつ!!」

宙をふわふわと舞い、そのまま顔を覆うように落ちてきた小布。

こんなときまでフラグ体質が発動したのか、股の部分がちようど鼻にきてしまう。

軽く息を吸うだけで、鼻腔の奥まで伝わってきたラベンダーの香り。一瞬、気が遠のきそうなくらい恍惚としてしまった直後、こんなところを持ち主の少女に見られたら、どんなお仕置きをされるかわからないと気づき、慌ててそれを払い除ける。

「ふはっ、はあ、美緒、お前、もう少し物の扱いを丁寧……んああつ!!」

そう抗議しようとした声が、幹胴の左側に押しつけられたねつとりと熱い感触で、情けなく上擦つてしまう。

「あたしだつて、で、できる！ これくらい、しちやうんだからあ……あふうつ!!」

そそり立つペニスを挟み、黒髪のヤンデレ少女を睨み合う金髪の幼馴染み。彼女も詩音を真似て少年の腰で正座し、その割れ目を剛直に押し当ててきたのだ。

「美緒、お、お前まで何を……んふっ、うあっ」

「う、うるさいわね！ はしたないとか、恥ずかしいとか、そんなのわかってる！ それでも……負けられない！ 遼人を好きだって言う気持ち……負けてないんだからねっ!!」

『ツン』を越え、すつかり『デレ』全開となった金髪少女は、宥めようとする遼人を一喝すると、ムキになって腰を素早く上下に振り始める。

ヌチュツ、クチュツ……チュプツ、クチュル……。

「んふうっ、負けない……あたしも遼人のこと……す、好きいつ。本気で好きなんだからね……あんうっ、ふあっ、あふうっ！ だから、恥ずかしいこともできるうっ!!」

長い金色のツインテールが大きく揺れ、鞭のように少女自身の二の腕や背中を打つ。

その情熱的な想いのこもった腰使いに合わせ、とろみのある蜜に塗れた肉唇が肉槍の左半分にしゃぶりつき、休みなく扱き続ける。

「美緒……んっ、ううっ！ そ、そんなに激しく……んくっ!!」

まるで生き物のように蠢き、ぴつたりと隙間なく吸いついてくる小陰唇。時折、その上端で物欲しげに震えている硬い雌核が雁首と衝突し、一際強い刺激を与えてくれる。

「はひっ、んあっ、ああっ、遼人……好きっ、くんっ、はふううっ！」

「くうっ、ツンデレが素直に気持ち伝えるなんて、ルール違反です！ もう少し、自分の属性に見合った態度で……んあっ、せえ、迫りなさい!! この……くんっ、うっ」

愛を真つ直ぐに訴えて悶える美緒を、向かい合う黒髪のヤンデレ少女が忌々しそうに睨みつけて叫ぶ。そのまま身体を大きく前に倒し、これは自分のものだと主張するように割れ目をしっかりと幹胴へ押しつけてきた。

綻ぶ割れ目に竿の行程が強く噛み締められ、蕩けてしまいそうな感覚に思わず腰が引けてしまう。芯を走る痺れが陰囊まで響き、根元に熱いものが込み上げてきそうだ。

「ツンデレでも、何でもお……好きな人に好きって言わないと、後悔する！ やつと、そうわかったから……んふっ、はあ、もう、に、逃げない！ んふっ、あああつ」

対峙するツンデレ少女も張り合うように身体を前へ押し出し、ライバルである黒髪の幼馴染みを額が衝突しそうな至近距離で睨みつける。

ミチイと濡れた粘膜肉が広がる音と共に、彼女の割れ目もより深くまで竿を啜える。

左右からグイグイと押しつけられた肉裂同士が、剛直を挟んで軽くキスしてしまいそうな状態。あまり濃くはない恥毛同士は既に一部で絡み合っていて、それがふわふわとくすぐるような刺激を亀頭の辺りに与えてくれていた。

「もう、は、離れなさい！ 美緒さんのが当たって……ひゃうっ、くううっ！」

「しーちゃんこそお……んっ、はあ、こんな……あはあつ、あんんんっ!! 又ル又ルしたのが……りよ、遼人のオチンチン越しに擦れて……くふっ、はあ、んうっ！」

クチュルッ、ヌツプウツ、ジュリュウツ……ニチユツ。

「二人とも、そ、そんな……激しいって、もお……くっ、はあはうっ、ううっ」

抗議の言葉をぶつけ合いながら、揃ってリズムカルに腰を揺さぶる乙女達。

熱さも、柔らかさも、締めつけも。それぞれ微妙に違うそれぞれの秘所で、同時に肉竿をしゃぶられる。竿のほぼすべてが濡れた媚肉に包み込まれ、まるで腔内へ埋めているかのような感覚。混ざり合う甘い蜜臭が顔の方まで漂い、それを少しでも多く嗅ぎたいと言わんばかりに、呼吸が自然と熱く、荒くなってきた。

「んあっ、はあ、そ、そんな苦しそうに息を切らして……んふっ、はあ、もうギブアップして私に任せたらどうですか？ くはあ、はあっ、あんんんっ」

「しーちゃんこそ、疲れてるだろうし、無理しないで……はひっ、ふあああ」

見つめ合ったまま憎まれ口を叩く、黒髪と金髪の少女。だが、その瞳は愛しい少年の剛直に奉仕する喜びで蕩け、いつものような険悪な雰囲気は払拭されている。

少年の胸板の方へ投げ出されていたそれぞれの手が、いつの間にか少し遠慮がちに繋がれていた。昔、遼人が詩音を公園に連れていくようになって少し経った頃、なかなか打ち解けようとしなない二人の手をこうして半ば無理矢理繋がせたことがあった。

少し照れながら、それでもあえて離そうとはせず、そのまま共に夕暮れの帰路を歩む。

懐かしい日の記憶が脳裏に蘇り、ようやくあの頃の幸せをこの手に取り戻すことができただのと、改めて実感が湧いてきた。

「はあつ、んつ、ああ……美緒さん、身体、前に出しすぎ……です。む、胸……擦れてえ……んはあつ、うううつ！ はあ、きやふうつ、ああつ!!」

「しーちゃんのおっぱいが……お、大きすぎるのが悪い！ そのせい!! む、昔はあたしと同じでツルペタだったのにい、そつちだけそんなに……にやあつ、んんー!!」

「動くの……や、止めなさい！ 乳首……んふあつ、はあ、あ、当たつて……」

「そつちでしょお。大きい分、プルプルといっぱい揺れてえ。んにやつ、ああんつ！」

少女達も快感が高まってきているのか、どんどん身体が前のめりに倒れ、互いの身体で支え合うような状態になっていた。小さく震える美緒の美乳と、迫力満点に揺れる詩音の爆乳が動きに合わせて擦れ、見守る少年を視覚的にも欲情させてくれる。

「二人とも……俺、やばい。もう……か、身体、勝手に動きそう……」

目が眩みそうな興奮を堪えきれずに眩き漏らした直後、その宣告どおり、半ば無意識のうちに腰を思い切り突き上げてしまった。

張りつく左右の肉唇を卑猥な形に捲り、包皮に隠れているクリトリスを肉傘で弾く。

「きやふうつ、りよ、遼くん……いきなり動かれると、擦れて……くふああつ！」

「ダメっ、も、もう限界だったのに、もつと……にやふつ、くうんんつ！」

不意打ち気味に与えられた刺激に、幼馴染みの乙女二人が仲良く甘い嬌声を漏らす。

腰が抜けてしまったようにがっくりと崩れ、互いに支え合い、どうにか身体を起こして



いる状態。激しく上下している双丘の動きが、呼吸の荒さを雄弁に訴えている。

「だって、俺も気持ちよすぎて……んっ、それに、一方的にされてばかりじゃ不公平だからさ。少し……いいところ見せないと。あふっ、んんんっ！」

もっともらしい理由を呟きながら、より強い刺激を求めて一心不乱に腰を振る。

肉ヒダが痙攣を繰り返し、竿肌をくすぐるように絡みつく詩音の肉裂。

表皮を噛み締めるように、全体が硬く収縮し始めた美緒の割れ目。

それぞれに特徴的な反応を見せる秘所を、今にも破裂しそうなくらいふくれあがった剛直で擦っていると、溢れ出てくる愛液が飛沫となって盛大に散り始めた。

「遼くんっ、そこおっ、はあ、激しい……きゃふうっ、イイツ、くんんうっ！」

「何だか、い、入れられてるみたいでえ……すごお……ひんっ、あふうっ！」

「俺も、二人の中をいっぺんに掻き混ぜてるみたいで、凄くいい……うああっ!!」

又チュツ、グチュルツ……又プツ、ニチュツ……。

指をしっかりと絡め、抱き合うように乳房を押しつけながら悶える幼馴染み達。

下腹部全体が痺れるような射精の予感を噛み締めつつ、遼人は腰上に正座する二人の身体をはね飛ばすような勢いで腰を振りまくる。

濡れた小陰唇を乱暴に撫で擦る、卑猥すぎる水音。それにますます興奮を感じ、ピストンを加速させようとしていた最中、いきなり左右の手を誰かに掴まれた。

「一方的じゃ不公平……か。それなら、あたいもしてもらっていいよな？」

「私も、お願いしたいです。ふ、不謹慎ですけど、見ていたらお腹の奥が疼いてきて、とても我慢できなくなってます。ここ、あ、熱くなつて……ああつ」

熱に冒されたかのように上擦っている、ヤンキー少女と委員長の声。

いつの間にかベッドに上がり、膝立ちで左右から迫ってきていた彼女達、それぞれの秘所へ、掴まれた手が力任せに導かれていく。

「んっ、はあ、う、うん……わかった」

快感に支配され、意識がほとんど吹き飛びかけているせいだろう。遼人は抵抗することもなく、指先にヌルリとした割れ目の感触が伝わってきた直後、反射的に指でぷっくりと盛り上がった肉唇を押し分け、それぞれの穴口へほぼ同時に人差し指を突き入れた。

「くあうっ、涼邑あ……んうっ、いいっ、そこ……くふっ、ああああつ！」

「きい、きてますっ！ 遼人君の指、わ、私の中に……はひいっ、イイイッ!!」

右手の指で樹里、左手の指で智子。もう入口から蜜が滴るほど濡れていた肉穴は、剛直に比べれば圧倒的に細い指を、いともたやすく啜え込んでくれた。

(やっぱり、感触違うな。樹里の中は凄くきつく締まって、壁もうねうね動きつばなしだ……委員長の中は最初から窮屈で、愛液の量が凄く多い)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性に入っていない

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



ニミミクランリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



ニショクペンリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクラインズ

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



Valkyrie

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!